提出日：令和　4年　3月　3日

所　属：　食品衛生学研究室

氏　名：大仲賢二　職位：講師

Ⅰ　ティーチング・ポートフォリオ

1．教育の責任（教育活動の範囲）

食品生命科学科に所属し食の安全分野の教員として食品衛生学（特に微生物学系）を中心とした教育活動を行なっている。主たる授業科目は食品衛生学、病原微生物学であり、加えていくつかの講義・演習・実習の分担及び卒業論文の作成指導を行っている。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
食中毒科学	食品生命科学科	必	3	90
食品衛生学実習	食品生命科学科	必	3	89
HACCP 管理論	食品生命科学科 環境科学科 動物応用科学科	選	4	110
病原微生物学	食品生命科学科	必	2	97
食品衛生学	食品生命科学科	必	2	88
食品衛生学	環境科学科	必	2	70
食品衛生学実習	環境科学科	選	2	10

2．教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

教育のあるべき目標は、社会ルールを守り、新たな知識や技術を「知ること」に喜びを感じ、新たに知り得た知識や技術を社会に応用することのできる人財を育てることと考える。ITC の発展により様々な情報が、その真偽、優劣に関係なく瞬時に大量に得ることができる。学生にはこの情報過多の中でどの情報が必要か、どれが正しい情報なのかを判断し整理する能力を持って欲しいと考えている。教員として、新たな知識や技術を知ることに喜びを感じる姿を示し、迷ったときには本学の学生である間のみならず卒業してからも気軽に訪れ意見交換や人と人との中継ぎの場を提供できるようにしたいと考えている。

3.　教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

・社会ルールを守る授業を行う

授業に際して、ルールを提示しルールに基づいた授業を行っている。具体的には、授業開始時間の厳守、提出物の提出方法と提出時間の厳守を行い、決められたことを守ることで、集団生活で重要な、「約束を守る」ことを認識することのできる授業運営を行っている。

・学習者が授業にしっかりと参加する

学習者が主体的に問に対して調べ、調べた内容を発表する機会の多い授業を行っている。具体的には講義中で新たに出てくる言葉の定義をこちらから学習者に問いかけ、参考書やスマートフォン経由して検索をして発表してもらい、その発表内容についてコメントを加えて説明を行という形で、自ら調べて発表するように授業を設計し調べることで、色々なことを自分で調べれば理解できるという自己肯定力をつけることのできるように授業を企画している。

・情報の整理ができるような授業を行う

こちらの問いかけに対しての発表の際に、情報源と情報の内容を伝えてもらうことで、どの情報源を使ったらよいかも併せて解説を行うように授業を行っている。

アクティブラーニングについての取組
食品衛生学実習において、今まではこちらが実習前に必要な器具機材を予め準備をしておき、学習者には実際にこちらが準備をしているものを使って手を動かすという形で行っていたが、前もって必要なプロトコールを提示しそのプロトコールから実験に必要な器具機材など準備物および実験の流れのプレゼンしてもらい、そのプレゼンでの資料に基づき実際に準備、実験、片付け、まとめという形で学習者が主体的に行うようにしている。

ICT の教育への活用
学理を利用して事前に実験の流れ等を学理の課題に提出するようにしている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

1　教育（授業，実習）の創意工夫（B）
学習者に知りたいと思えるような内容（実際に自分が将来遭遇する可能性がある事象や、現在社会で注目されているような事案）を交えて授業することを意識して行った。また、授業で用いるスライドは、努めて文字サイズが 28pt 以上の大きな文字を使用して見やすく、1 枚のスライドの内容量を少なめにするようにし見づらいというストレスを軽減するようにした。
2　学生の理解度の把握（B）
本学の学習支援システム「學理」を用いて講義した内容をさらに深められるような課題を設定し理解力のチェックを行っているが、授業時間との関係で十分には行えていない。
3　学生の自学自習を促すための工夫（A）
講義内で、その時の講義内容に沿った形で（食品衛生学の場合は、法律に基づいていろいろな食品について実際に販売しているものを調べてもらうこと）身近なところで、学習者が学んでいるものが活かされていることを体験できるような課題の設定を行い、知る喜びを感じることができるようにしている。
4　学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）
メールでの対応や直接来室をしての対応など、学習者が望む方法で対応するように行った。また、メールでの質問に対して次の日までには必ず返信を行うようにして学習者の不安を取り除くように努力した。
5　双方向授業への工夫（B）
④の学生とのコミュニュケーションに記載したが、対面ではない学習者が不安に思うことが多いと思い、メールでの質問に対しては次の日までには必ず返信を行い、学習者が理解できるまでやり取りを続けた。また、対面の時は、こちらか質問を投げかけ、それに対してその場で調べて答えてもらい解説するように心がけた。

5.学生授業評価

1　授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。
学習者が出席の確認方法で不安を感じていることから、不安を取り除くように講義のはじめに文章で掲示し説明を行った。
2　①の結果はどうでしたか。
特に不満を持つ訴えはなかった。
3　②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。
出席の確認方法については、講義前に丁寧に言葉だけでなく掲示し丁寧に説明のうえ対応をしたいと思う。

6.学生の学修成果

1　学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。
現在、学習者自身が履修内容の理解度を把握すること到達目標に達してるかを判断すること

が困難である。授業時間との関係もあるが「學理」の課題提出の機能を使い、学習ペースもこちらからコントロールしながら理解度をチェックするように行い、成績向上につながる実施方法として講義（単元）ごとに目的を説明してから解説をしていこうと思う。 2　教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価 授業アンケートにおいて、理解力を確認できると自由コメントが得られている。
7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況） 授業改善につながると考える FD 研修会はオンデマンドを含めて全て参加しており、他学や他教員の指導力向上のための取り組みを積極的に自分の講義に取り入れるよう努力している。
8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン） 今後も引き続き食品衛生における最新の情報の把握に努め、これらの情報を交えた教育を行うことで、今、学んでいることがどうして重要なのか、また今後の学修や卒業後の社会活動にどのように結びつくかを理解させた上で、知る喜びの重要性を説き、新たに知り得た知識や技術を社会に応用できる人財の育成を目指した教育を展開していくことを目標にする。
9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ シラバス、授業アンケート、學理、FD（リアルタイム、オンデマンドを含む）研修会の参加記録（受講後のアンケート提出）、授業で用いた配布資料、スライド資料および授業動画